

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370940

研究課題名(和文)潜在的な宗教者と「知識」の配置をめぐる民俗学的研究

研究課題名(英文) Research on the presence of potential religious leaders and knowledge in society.

研究代表者

山田 巖子 (Itsuko, Yamada)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20344583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：1970年代から80年代までのオシンメサマに関する調査資料群をデジタル化し、再編集を行った。『オシンメサマのお年越しー喜多方市編ー』と題する報告書を2015年に、『増補・改訂 会津のオシンメサマ』と題する報告書を2017年に作成した。日本民俗学会では、「『潜在的な宗教者をめぐる予備的考察ーオシラ神信仰者めぐってー』と題する発表を2015年に「オシラ神信仰者と『知識』ー『個人的なるもの』をめぐってー」と題する発表を2016年に行った。説話・伝承学会では「鬼をめぐる『知識』の配置とその活用ー青森県津軽地方における鬼信仰めぐってー」と題する発表を2016年に行った。

研究成果の概要(英文)：Regarding the Oshinmesama belief in Fukushima Prefecture, I and Ayako Shibata digitalized hand-written records and stencil printing plates, photographs from the 1970's to the 80's. We made a report on the "A Ritual called Oshinmesama no Otoshikoshi :The religious ceremony in Kitakata City in Fukushima Prefecture" in 2015. We published a book on "The Oshinmesama belief in the Aizu Area in Fukushima Prefecture" in 2017.

I made three research presentations about "Basic Research of Potential religious leaders in the Tohoku area " at the Folklore Society of Japan in 2015, about "Knowledges on personal belief in Oshirasama" at the Folklore Society of Japan in 2016, about " Knowledge and practice of Oni in the Tsugaru Area in Aomori Prefecture " at the Japan Society of Folk-Literature and Traditions in 2016.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：オシラサマ 潜在的な宗教者 知識 憑依 民間宗教者 信仰の動態

1. 研究開始当初の背景

(1) 宗教者概念と「民俗知」の再検討

日本における民俗宗教論は、宗教者という概念を重視してきた。この概念は、近世宗教史における身分的周縁論と接合して検討する必要があるが、未だ十分に展開されていない。

「信濃巫女」と呼ばれた民間宗教者に関わる豊富な研究蓄積を持つ中野洋平氏は、「民間宗教者と地域社会 多様な在り方を見つめ直す」と題する論攷において、藩政期に活躍した信濃巫女たちは、明治以降、旧幕府時代の権力を剥奪されたため、新に自分たちの由緒を創出し、自らの存在を「神聖化」する必要があった、と述べている(八木透編『新・民俗学を学ぶ』2013年 昭和堂)。この論攷からは、地域の日常の中にある「生業としての宗教的行為」を把握する必要と近代以降の変質を把握する必要性が読み取れる。

小池淳一は、地域論をふまえた民衆知分析の構築を目指した澤博勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会3 民衆の知と宗教』(2008年 吉川弘文館)の中で、「民俗知とは何か - 宗教者概念の再検討」と題する論攷を発表している。この論攷では、福島県南会津地方におけるハウインと呼ばれた宗教者の活動を史料によって跡づけ、彼等が民衆の信仰に関わる「知」をも取り込んでいたことを示した。また彼等が伝えた儀礼や呪術は、現在、地域住民が実践していることを示し、住民と宗教者の相互作用を動的に把握する必要を示した。

代表者は山梨県の富士山の北麓に住む人々の日常の会話(世間話)の分析から、宗教者の評価や使い分けを論じた(「世間話の中の民間宗教者 オウカガイの位置」中野猛編『説話と伝承と略縁起』1997年 新典社)。その結果、オウカガイと呼ばれる人々は、地域の人々から「宗教者」とは目されておらず、他の民間宗教者に期待されるような強い呪力も期待されていないことが分かった。占いの方法は地域の住民も実践している簡便な方法であり、その能力が突出していると近隣の者に知られ、依頼者が増えてゆく、という経過をたどる。占いの経験を語る会話では、占う主体は問題にされず、地域の人々にとってオウカガイは、職業的な宗教者に比べ安心できる存在であった。このような地域の人々の認識を利用して、職業的な宗教者がオウカガイを名乗るということも起こっていた。このような事例の検討から「民間宗教者」という概念については考察の余地があることを述べた。

(2) 宗教的な知識の日常化過程

従来の民間巫者研究では、民間巫者に移行する可能性を持つ、熱心な信仰者の存在は認識されていたが、周縁的な存在として主要な関心を払われることはなかった。近年の文化人類学、宗教学の研究では、宗教と日常の関係を問う中で、このような存在が議論されて

いる。大橋亜由美「バリにおける呪術的世界の周縁」(白川千尋・川田牧人編『呪術の人類学』2012年 人文書院)では、インドネシアバリ島の宗教的職能者のバリアンのうち「周縁的な」バリアンに注目し、このような存在が専門的な宗教者の知識・技術を日常の中に浸透させる役割を担っていることを論じている。

代表者はまた「夏泊半島における民間宗教者 移動と役割」(平成15年度~17年度科学研究費補助金課題番号 15520056 基盤研究(C) 成果報告書『半島空間における民俗宗教の動態に関する研究』2006年)において、カミサマと呼ばれる人々には多様な内実があることを報告した。一生のうちの一時期にのみ巫業を行う者、認知されている範囲が狭い者、自他の認識にズレがある者などの存在を示し、これらの者が、地域の外の民間宗教者や特の寺社と結びつき、常にオシラ神に「新たな意味」を与え、コミュニケーションを通じた解釈活動によって、信仰を活性化させていることを示した。

(3) オシラ神研究史の中での位置づけ

楠正弘は、青森県津軽地方と福島県のオシラ神信仰を「個人的なるもの」と分類した(『庶民信仰の世界』1984年 未来社)が、「個人的なるもの」を支えるネットワーク、個人が祭祀者と変貌してゆくメカニズムなどの問題は、充分には展開されてこなかった。

代表者はオシラ神信仰の結節点である弘前市久渡寺での参与観察、アンケート調査、参詣者記録のデータの分析、オシラ神を「授かった」とする青森県と北海道在住の人々への調査から、それらの人々の多くは、複数の神々を「授かった」体験を持ち、自身も信仰の道に進もうとして踏みとどまった人が紛れていることを示した(山田巖子「授かる神々 オシラサマの奇瑞と霊験」2013年7月6日 日本昔話学会招待講演)。

一方、福島県のオシンメサマは、共同祭祀の際に参加者に憑依現象が起こることが知られていたが、「憑依現象」が起こる個人の資質や「憑依」が起こる「場」の権力関係、関与する宗教者、信仰者の個々人が持っている「知識」の種類については問われてこなかった。

本研究の代表者が2013年に研究代表を務めていた科研(平成23年度~25年度科学研究費補助金課題番号 23520974 基盤研究(C) 民俗信仰の再文脈化をめぐるダイナミズム)の調査過程において、福島県出身の在野の研究者である亀倉加久子氏から、1970年代後半から80年代にかけて調査した、会津地方のオシンメサマの調査資料の提供を受けた。これらは私家版の冊子、手書き資料と写真からなり、私家版のものは、公共施設や研究者に送付されてきたが、先行研究として位置づけられることはなかった。亀倉氏はワープロを使うことができないため、亀倉氏の仕事であることを明記の上、代表者によってデータを翻

刻の上、研究に資することを希望していた。

これらのデータの翻刻作業の過程で、オシンメ講に参加し、その「場」の祭祀者のことばとふるまいに関する豊富な情報を掲載し、「場」の詳細な経過を記述しているこれらの資料の特質を活かすためには「潜在的な宗教者」というキーワードで、再考する必要がある、と考えるに至った。

また、オシラ神祭祀に「うつらはる」「授かる」といった語彙の知識が、信仰を实践する人々にどのように共有され、どのような働きをするのかを比較研究する必要がある。

2. 研究の目的

宗教者とコミュニティの人々の中間に位置し、宗教者からの「知識」を再構成し、「普通の人々」の「感覚」に近づけてゆく「潜在的な宗教者」の役割を追う。具体的には

(1) 既に調査した青森県や北海道南地方で「オシラサマを授かった」と語る人々のうち「潜在的な宗教者」と目される人物の再調査を行い、彼等のネットワークと彼等の関わる民俗信仰の全体像を明らかにする。

(2) 1970年代後半から80年代にかけて福島県会津地方のオシンメサマの調査記録の追跡調査を行い、オシンメサマが「うつらはった」とされた人々の輪郭と、コミュニティ内の位置づけを行う。

(1) (2)の考察から宗教的な知識が「日常」で実践されるメカニズムを析出する。

3. 研究の方法

(1) 福島県会津地方の亀倉氏の報告を下に追跡調査を行う。

(2) 亀倉氏の手書きデータ及び写真、私家版の資料集をデジタル化する。

(3) 福島県のオシンメサマの画像、宗教者、祭祀者の分布を地図に落とし、信仰の分布と地理的な特徴について分析する。

(4) 青森県と北海道南地域の「潜在的な宗教者」と目される人々に再インタビューし、人生史とオシラサマ以外の信仰の全体像を把握する。

(5) ゲストスピーカーを招き、研究会を開催し、「潜在的な宗教者」の具体相を把握し、宗教者論の再検討につなげてゆく。

4. 研究成果

(1) 亀倉氏のデータが、当初預かっていたもの以外に膨大なものがあることが分かり、デジタル版の翻刻作業をした後、亀倉氏の手書き資料から、翻刻事例と関わるデータを追加してゆく作業を行った。この作業に膨大な時間がかかった。デジタル化、調査者の加筆訂正、再編集、調査者のさらなる加筆訂正、再々編集を経て2冊の報告書を作成した。

しかし当初の目標のように幅広い読者に向けて刊行するには、まだ検討の余地があり、研究上、参照できる形にデータを整理し、閲覧できる状態にするに留まったといえる。こ

の報告書作成の過程で得られた情報や考察については、学会発表などで明らかにした。

山田巖子・柴田彩子編『亀倉加久子調査資料集 オシンメサマのお年越 喜多方市編』(2015年3月)

山田巖子・柴田彩子編『亀倉加久子調査資料集 増補・改訂 会津のオシンメサマ』(2017年3月)

(2) 2015年10月11日に山田巖子『『潜在的な宗教者』をめぐる予備的考察 オシラ神信仰者をめぐってー』と題する発表を日本民俗学会で行い、「潜在的な宗教者」という術語の射程を示した。

(3) 連携研究者の小池淳一氏は、東北地方の、神社の管理を行う存在として知られていたベトウに注目し、熊野信仰のベトウについて、青森県下北半島において調査を実施した。

(4) 小池淳一氏はマタギの持つ知識について、津軽地方のマタギの家系の女性から聞き書き調査をした。

(5) 2016年10月2日に山田巖子「オシラ神信仰と『知識』『個人的なるもの』をめぐる『知識』」と題する発表を日本民俗学会で行い、青森県津軽地方と福島県会津地方のオシラ神信仰者について、「(宗教者としての)資格」、「憑依現象」、「語彙」の観点から比較研究を行った。

(6) 2016年12月28日に、弘前市中央公民館「地域未来創生塾」において、山田巖子「東北の民俗神 『授かる』『うつらはる』オシラサマ」と題して、青森県津軽地方と福島県会津地方のオシラ神の信仰形態の違いを市民向けに分かりやすく講演した。

(7) 2016年11月13日に山田巖子「鬼をめぐる『知識』の配置とその活用 青森県津軽地方における鬼信仰をめぐる『知識』」と題する発表を説話・伝承学会において行い、鬼をめぐる知識の実践者としての民間宗教者カミサマの具体的な活動と、鬼をめぐる「知識」の収集、編集者としての近世後期から明治初期までの津軽地方の国学者の存在を示し、民衆の「知識」の重層性を示した。この発表内容は説話・伝承学会の学会誌に2017年に投稿予定である。

(8) 2017年3月に論文集、山田巖子編『潜在的な宗教者と知識の配置をめぐる民俗学的研究』を刊行した。

本論集において、代表者は、2015年10月の日本民俗学会での発表をもとに稿を成した『『潜在的な宗教者』をめぐる予備的考察』を掲載し、「潜在的な宗教者」というカテゴリーで再検討されるべき存在について具体例を挙げて述べ、そのカテゴリーの有効性を示した。

連携研究者の小池淳一氏は「ベトウの民俗的位相とその意義 青森県下北郡東通村の事例からー」を寄稿し、村中健大、山本拓朗らの研究を受け、下北地方における熊野信仰のベトウの調査資料を示し、研究史上に

位置づけた。

また、磯沼萌氏は「青森県下北地方におけるテラ再考」を寄稿し、下北半島における宗教的な施設とみなされてきたテラを、テラ内に置かれた道具と空間利用に着目し、老女らの活動を分析してその「日常性」を析出した。その結果、宗教的な行為を偏重して論じてきた従来の研究史に検討を迫った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 3件)

- 1 山田 巖子、「『潜在的な宗教者』をめぐる予備的考察 オシラ神信仰者をめぐって―」, 2015年10月11日、日本民俗学会第67回年会、関西学院大学西宮キャンパス(兵庫県西宮市)
- 2 山田 巖子、「オシラ神信仰と『知識』『個人的なるもの』をめぐる―」, 2016年10月2日、日本民俗学会第68回年会、千葉商科大学(千葉県市川市)
- 3 山田 巖子、「鬼をめぐる『知識』の配置とその活用 青森県津軽地方における鬼信仰をめぐる―」, 2016年11月13日、説話・伝承学会2016年秋季大会、京都女子大学(京都府京都市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 巖子 (Itsuko, Yamada)
(弘前大学・人文社会科学部・教授)

研究者番号：20344583

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

小池 淳一 (Junichi, Koike)
(国立歴史民俗博物館・民俗研究系・教授)

研究者番号：60241452

増山 篤 (Atsushi, Masuyama)

(弘前大学・人文社会科学部・准教授)

研究者番号：50322079

(4) 研究協力者

柴田 彩子 (Ayako, Sibata)
(弘前大学地域社会研究科・客員研究員)